

特別講演

Not for all time, but of an age——Shakespeare 本文研究・編纂理論の 1 世紀

講師：金子 雄司（中央大学名誉教授）

（要旨）

◆ある学問分野について、その 1 世紀にわたる流れを短時間で語ろうとすること自体、無謀な企てであることは論を俟たない。そのことを承知の上で、シェイクスピア本文研究・編纂理論、そして実践の結果である編纂本について、大まかなお話しをするつもりである。シェイクスピア研究のさまざまな領域のなかで、本文研究・本文批判・編纂理論のような分野は、日本の研究・教育において関心の度合いが最も低いところである。そこには、この領域が実際にシェイクスピア作品を編纂するのでなければ、無用のものであるという考えがあるのかも知れない。しかし、もしそのように考えるのであれば、英語圏においてもごく限られた人数の編纂者にしかこの領域は必要ではないであろう。筆者自身に限れば、この分野の研究を行ってきたのは、シェイクスピア作品の編纂本を出版することが目的であるのではない。シェイクスピア作品として伝わってきて、われわれの手の中にあるものがどのようにして成立したのかに関心があるからである。

◆この問題を論じる切り口はさまざまあろうが、本文研究で作者 **author**（ここから **authentic** であるシェイクスピア作品本文という概念も生じる）をどのように扱うか、言い換えれば、作者とは何かという問は根源的であると思われる。そしてもうひとつのキーワードは「科学、科学的」**science, scientific** である。これら 2 概念を中心にして、限られた時間の中で、「作者」シェイクスピアが過去 1 世紀の本文研究、編纂理論の中でどう捉えられてきたかに焦点を当ててみたい。**Shakespeare** 作品最初の印刷本にはどのような印刷用稿本が用いられたと推測されるか？そして、これらの印刷用稿本は **Shakespeare** 時代の印刷プロセスでメカニカルにまた編集上でいかなる扱いを受けたと考えられるか？これらの疑問をまとめれば、残されている最初の印刷本は **Shakespeare** が実際に書いたものにどの程度近いのか？ということになる。しかしながら、**Shakespeare** 本文編纂上このような問が正面から、初めて発せられたのは 20 世紀初頭のことなのである。F1 に付された *'To the Great Variety of Readers'* の中で **Heminges** と **Condell** が述べていることの真の意味を検分しようとしたのが **Pollard, R. B. McKerrow, W. W. Greg, John Dover Wilson** たちであった。後に、彼らの研究をひとまとめにして **New Bibliography** と命名されたことはよく知られているとおりである。特に、**Pollard** が唱える **Good/Bad Quarto** カテゴリーが作者 **Shakespeare** の核心であるとされたのである。

◆特に、*Richard III, Hamlet, Othello, King Lear* などのように、複数の最初期印刷本を有する作品の本文編纂に当たっては、いずれかひとつの版を編纂上の「底本」**Copy-Text** とし、他の版から読みを採り入れて合成本文を作成することが校訂本 **critical edition** の

条件とされたのであった。その後、New Bibliography が合衆国での発展形である 新・新書誌学 Newer Bibliography と呼ばれる書誌学的研究法となった。その最大の特徴と言えるのは植字工分析、印刷工程最中の訂正、破棄、割り付け casting-off などの分析である。そして、それを通じて Shakespeare の「真の本文」 a true text に至る路を前進することが出来るという希望であった。その中心に位置するのが校訂本による Shakespeare の決定版 definitive edition であり、それは底本原理によってもたらされると信じられたのであった。この「底本原理」The Rationale of Copy-text は Greg により 1951 年に発表されたのであった。第 2 次世界大戦後、書誌学・本文研究の中心は北米に移ったのであるが、この「底本原理」は新・新書誌学の進歩・発展によりさらに細緻に整形された。その中心人物が Fredson Bowers であるために、Greg=Bowers 理論と称されることが普通である。

◆Greg=Bowers 理論の核心は、作者 Shakespeare が書いた原稿、それも、決定稿、いや決定稿には必ずしも具現されていない作者の意図、を新・新書誌学的分析により、科学的に再構築出来るのではないかということである。20 世紀初頭における自然科学の偉大なる進歩、即ち、観察可能な自然現象について、不可視ではあるが必然である、物理学的原因を科学者たちが発見したように、書誌学・本文研究者は印刷本の背後にある失われた草稿に備わっている特徴を再現することが出来ると思い描いたのである。プログラム資料に Greg の著作から引用したが、'the establishment and history of the text' 'the science of the transmission of literary documents' という文言の背後にあるのは、恐らくそのような科学に対する信頼であったと思われる。その作業により「印刷というベールを剥がす」ことであるという Bowers の有名な言葉から推測できるように、印刷本しか残っていない Shakespeare 作品から「Shakespeare の作者性」を導き出すこと、それをアイデア的本文 ideal text とした。顧みれば、Greg=Bowers 学派の絶頂期であった。

◆ところで、1980 年代から盛んに行われるようになった新書誌学派に対する批判は作者の意図、それに関連するアイデア的本文という概念にまつわるものであった。新書誌学派の本文をプラトンの理念とすれば、批判派のそれは現実的と称することが出来る。新書誌学派にとって、本文の最終的形態とは作者が作品 (work) において表現することを意図した全てを再現しようとするものである。書き表されたもの（具体的には、異なる版本）のどれかひとつを以て作品全体を知ることは不可能である、という立場である。なぜかならば、現存する本文形態は伝達しようとする作品を常に不完全にしか行い得ないものであるからである。従って、個別の Shakespeare 作品について言えば、複数本文のどれかひとつをもって作品全体を伝えることは出来ない、ということになる。つまり、物理的な形態で存在し得ない。ここに、複数本文の分析を通して、底本選択の原理に基づく合成本文の存在理由があるわけである。

◆けれども、1980 年代前半までの本文研究・編纂理論は既に Greg=bowers 理論に疑問を投げかけ、また場合により、真っ向から否定する立場の本文編纂理論が既に大きな流

れを形作っていた。それは文学批評の分野においてと同様に、ヨーロッパ大陸の文学理論から、直接的に、あるいは間接的に、影響を受けた文学批評理論が支配的になったのと、ほぼ軌を一にして本文編纂理論の領域にもその影響は及んだとみてよいであろう。特に、フーコーの作者論は大きな影響を与えたといえる。

◆さて、Greg=Bowers 理論による理念上の本文に対して、例えば、Jerome McGann は *A Critique of Modern Textual Criticism*(1983)で以下のような批判を繰り返す。即ち、非物理的形態としてのイデア的本文と物理的形態としての複数本文を区別することは、本文分析上は有用であるにしても、理論的にしか存在し得ないものである。なぜかならば、この概念によれば作品は物理的形態としての本文として表現される以外に表現可能な方法はないからである。文学作品は物理的存在と遊離した形態で存在することは出来ないからである。さらに、劇作品は他のジャンルとは大いに異なる性質を持つ。それは本質的に上演という共同作業と流動性と不確定性を併せ持つジャンルである。仮に、文学作品一般の作者の意図が本文再生産において可能であるとしても、劇作家の（それも、現代と異なった地位を有していた時代に）意図を Shakespeare 本文再生に持ち込むことの妥当性は改めて問う必要がある。

◆過去 1 世紀にわたるシェイクスピア作品本文研究において、科学的方法により積み上げられた結果、到達点は indeterminacy 不確定性こそが本文の本質なのであるということである。本文の根源的な不確定性こそ本文研究・編纂の基礎である、ということである。Stephen Orgel は ‘What Scientific bibliography has taught us more clearly than anything else is that at the heart of our texts lies a hard core of uncertainty’ と述べている。20 世紀末にわれわれのシェイクスピア本文に関する認識は一方でここまで来たのである。

◆しからば、シェイクスピア編纂本はどのような物であるべきなのか。例えば *Hamlet* を例にとれば、学術的な編纂本ではこの作品の歴史性 historicity を可能な限り読者に提示する物であるべきだ、と考える。Q1, Q2, F1 はもとより、17 世紀後半から 18 世紀の受容の歴史を知ることが出来るものであるべきであると考え。紙ベースの出版物では容易に実現できない。しかし、電子データが日常になった現在では叶わぬ夢ではない。マウスのクリックひとつで、Q1 から F1, そして F1 から Q2 へと移動することが出来て、しかも原本のファクシミリおよびディプロマティック印刷本が簡単に比較対象・検討できる。そのような形である。Q2 を copy-text として Q1, F1 から読みを取り入れた伝統的合成本文は必ずしも排除しない。また、ハイパーテキストによる語句、文法、他作品への言及を可能とする物にする。ただし、問題が無いことは無い。PC プラットフォーム、OS ヴァージョンなどが進化することにより、データとして使うことが出来ない場合が生じる。更に、かつての Arden CD-ROM に見られるように、コストの高さ（40 数万円であった）。つまり、一体誰が買って使うのか？という問題が一方にはある。

◆The New Cambridge Shakespeare シリーズの general editor であった Arthur Quiller-Couch は Dover Wilson とはかなり違った編纂方針であったと伝えられている。それは

レディーがピクニックに携帯できるような版本にしたいということであった。ちょっとしたエピソードに過ぎないけれども、シェイクスピア編纂本とその出版に関して重要な示唆を与えているように思われる。つまり、既に概略見て来たように、シェイクスピア作品編纂本の理想の形は不可能に近いという認識である。そして、それにもかかわらず、レディーのピクニック用編纂本の需要は一方で確実にある。見方を変えれば、書誌学的・本文理論的・本文批評的研究が必ずしも編纂本を製造するとは限らず、マーケット・読者が選び取るように編纂本が作られているということである。出版事業には常にこのような力が働いている。そして、シェイクスピア編纂本も決してその例外ではない。



